The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	序
Author(s)	松山, 直藏
Citation	懐徳. 1925, 2, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大正甲子七月二十九日、碩園西村君東京に歿し、將さに歸り葬らんとす。懷德堂同人謂へらく。先生浪華に家居すること三十餘年。交游尤廣く、門生亦多し。亦夙に地を斯土に卜して、塋域を定む。而して懷德堂の興る、先生の力實に多きに居る。宜く其喪を堂に宿し、堂友をして哀を盡し、故舊をして訣別するを得しむべきなりと。乃ち之を遺族に請ふ。八月十日、嗣子時敎君等、遺骨を奉じて、歸り葬る。乃ち迎へて、之を堂上に安んじ、堂友及君が鄉人、喪を守りて宵を徹し、翌日にして葬る。葬るの朝、淸酌庶羞の奠を以て、靈を祭り哀を致す。故舊門生遠近來り弔する者數百人。越にて數日、堂友來り謀りて曰く、某等追悼錄を編し、一は以て平日景仰の情を慰め、一は以て先生敎育の恩に報いんと欲す。可ならんかと。余深く其情の摯なるを喜び、即ち之を贊し、徧く書を君の故舊講友諸先生に致し、君の軼事を寄示せんことを請ふ。期を限るに十月月底を以てす。書陸續として至るもの凡て五十許通。編するに先後の序を以てす。事、九月四日に始まり、乙丑二月一日に至りて功を畢る。日を費すこと百五十日。堂友有志勞を

分ちて事を執る。其の採訪蒐錄の事に當るもの、野口山本中川平野井上岡田諸學子及藤塚書記となす。文書の勞を執るもの、野口平野中川小沼諸學子及今川女學子となす。淨寫の役に任ずるもの、野口井上中川平野山本諸學子及今川女學子となす。校正の事は野口平野中川山本岡田諸學子及今川女學子等其勞を分ち、記錄の事は小沼岡田二學子之を主る。而して講師稻束君猛編輯印刷の事を董理す。則ち是編の成る、實に寄書諸人の惠と講師及堂友諸學子の力とに賴る。然りと雖も、君の德の人を感ずること深く且つ大なるに非んば、烏んぞ能く此に至らん。唯だ憾むらくは徵求未だ周からず、採訪遺すところあり、以て君が生平を盡すに足らざるを。惟ふに、君の學、晩年に至りて一變し、篤く程朱を守りて、毫も先正の矩矱を失はず。一に道學を提唱し、風敎を振起するを以て任となし、復た少壯才を負み、曠達自ら喜ぶの弊なし。故に是の編、事、君が早歲に繫るもの、未だ以て君が人と爲りを見るに足らず。而して其の孝友信義に至りては、則ち天性に出で、終始一貫、生の早晩を以て別たざるなり。憶ふ、余の乏を此堂に承く

るや、君、左右襄助し、凡そ懷德堂教學の事、大小となく、一に君と胥謀る。曩者、余篤疾に遘り、幸に死を免れたりと雖も、體魄復た舊時の比に非ず。君は則ち軀幹雄偉、氣厚く神固し。嘗に以爲へらく、余、生、君に後ると雖も、一旦朝露に先んじて歿せば、君にして幸に在る、堂の後事復た慮を勞するを要せすと。詎ぞ圖らん、事正に顚倒し、余をして無窮の戚を抱かしむ。噫。天如し君に假すに年を以てせば、學の涵濡するところ、德の霑被するところ、加ます深く且つ廣ければ、其の教化を裨補し、昭代を黼黻するもの果して何如ぞや。而るに今や則ち亡し。其れ悲むに足らざらんや。追悼錄編成るに及び、因りて其本末を叙すること此くの如し。

大正乙丑二月

懷德堂教授　松山直藏謹んで序す